

## 石川県甲種医学校の教科書

著者	板垣 英治
雑誌名	北陸医史
巻	31
ページ	24-30
発行年	2009-02-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/16846">http://hdl.handle.net/2297/16846</a>

# 石川県甲種医学学校の教科書

金沢市 板垣英治

明治十七年に開校した石川県甲種医学学校で行われた医学教育がどの様なもので在ったかを研究することは、わが国でのオランダ医学からドイツ医学への移行を、さらに新しい医学教育の始まりを明らかにする上で重要な事柄である。本稿では明治十五年に始まった全国の甲種医学学校について記し、次いで石川県甲種医学学校の教官及び医学講義で用された教科書に関する調査の結果を記述する。なお、同校で使用された参考書関係は紙面の関係から省略した。

明治新政府は明治十四年五月二十七日に、「第四号」輪郭附「医学学校通則別冊之通相定候條此旨相達候事」と「医学学校通則」の法令を發布した(1)。  
この「通則」の第一章の第二条に

「医学学校ハ之ヲ分テ甲乙二種トス甲種ハ尋常ノ医学科ヲ教授シ以テ医師ノ具成ヲ図リ前款ニ遵イ之ヲ設置スルモノトス」

第十条に

「甲種医学学校ノ教員中少ナクトモ三名ハ東京大学ニ於イテ医学士ノ学位ヲ得タル者ヲ以テ之ニ充テ主トシテ重要ノ学科ヲ分担セシムベシ」  
とあり補足として

「他ニ相応ノ学力ヲ有スル者アルトキハ文部省ノ認可ヲ經テ本文医学士ニ代ワルコトヲ得」

として、全国各県にあつた従来の医学学校が、東京大学医学部を卒業したばかりの医学士を採用して、次々と甲種医学学校に昇格した。

表一は明治十四年の「官立大学および官立府県町村立専門学校一覧」(国会図書館蔵)を元にして、さらに当時の各県職員録から二十一校の甲種医学学校の設立当時の校長を調査した結果をまとめたものである(2)。

当時の多くの県立医学学校の明治十四年の校長は、金沢を除いて殆どが東大医学部卒の医学士であり、すでにドイツ医学の教育をしていた。ところが金沢医学学校は田中信吾が校長であり、スロイス、ホルトルマンに教育を受けた人達によつて医学教育と診療が行われていた。明治十四年の資料によれば、金沢医学学校の生徒数が二三二名であり、全国一の生徒数であつたことが記されている。

他の医学学校では明治十五年に六校が、十六年に九校が甲種医学学校に昇格しが、金沢医学学校の甲種医学学校への昇格は十

七年三月と遅れた。

明治十八年の石川県職員録には、甲種医学校の職員名が記され、校長は岡山から来た中浜東一郎であり、医学教諭は内科の中浜、外科の木村孝蔵、眼科の山崎兵四郎であった。さらに、東大卒の理学士で石川県専門学校教諭今井省三が化学を担当し、中西要が組織学と眼科、羽田慎（担当不詳）が助教諭として、堤從清が薬学、篠原専次郎はドイツ語、水上鉞次郎は物理学を担当していた。堤と水上は医学校からの着任であった（3）。

さらに、詳しく石川県甲種医学校の人事を調べると、金沢医学校時代には、伴野秀堅（外科）、外山林介（内科、産科）、佐藤廉（内科）が医学教諭としていたが、長続きせず去り、医学士三名の条件を満たすことはなかった。

甲種医学校に昇格した明治十七年三月十二日の時点で、校長田中信吾のもとに、木村孝蔵、佐藤廉の二名がいたが、五月に佐藤が去り、新たに長谷川寛治（内科）が着任するが、僅か五ヶ月で去っていた。ついで眼科の山崎兵四郎が着任し、さらに中浜東一郎が十一月十五日に内科教諭として着任した。ここで校長は田中から中浜に代わった。この直後に田中と中浜等との間で軋轢が生じて、田中は十二月に辞任して、私立尾山病院を元の同僚らと建設して開院した。この様な錯綜した教諭の出入りを繰り返しながら、

本校は明治二十年を迎えた（4）。同年の「学校令」により本校は石川県専門学校と共に、第四高等中学校に昇格することになった。

明治十七年に発行された『石川県甲種医学校校則』には、その付録に講義のシラバスである「教授の要旨」が記載されていた（5）。各教科で使用した教科書名と、講義の内容を示している。その資料をまとめて表二に示した。

解剖学では田口和美訳著の『解剖攬要』を、組織学では同じ訳著の『人体組織攬要』を、生理学では東大医学部でのチーゲルの『生理学講義録』を使用した。さらに眼科、皮膚科、婦人科産科では東大医学部でのドイツ人医学教師の講義録を、裁判医学ではホルトルマンの中毒学講義録、動物学では『斯魯斯氏講義動物学』が使用された。

解剖学の教科書『解剖攬要』は、ドイツ人教師デーニッツが明治九年に東京医学校で講義した解剖学の講義録を基にして、初代解剖学教授であった田口和美が編集して明治十年七月に出版したものであった。この序文は内務省衛生局長（東京医学校長）であった長与専齋が書いていた（6）。組織学では田口和美の『組織攬要』が使用され、参考書はチーゲルの組織学講義録、フライの組織学書と書かれている。

田口和美の『組織攬要』の表紙には「組織攬学」とあり、ドイツ教師ギーケルの組織学の講義録を元にして編集されたもので、明治十三年から十七年にかけて四巻が出版された。その内容は巻之一では細胞、組織の性質、巻之二では、臓器論で消化器、呼吸器を、巻之三では泌尿器、男性生殖器、巻之四では女性生殖器に関して記述していた。

組織学講義の参考書は

Tiegel, F., Physiologische Vortage, gehalten in der medicinischen Akademie zu Tokyo, 1878-1879.

Frey, H., Handbuch der Histologie und Histochemie des Menschen: für Aerzte und Studirende, Verlag von Wilhelm Engelmann, Leipzig, 1876.

であった。

生理学ではチーゲルが明治十一年―十二年に行つた「生理学」講義の記録を東京大医学部で出版したものが使用された。但し、チーゲルが誰の生理学書を使用したのか不明である(?)。

この講義録は右側の頁には、ドイツ語での講義の内容が活字で印刷され、左側の頁は白紙で、使用者が学習して全面に書き込む様になっていた。このチーゲルの生理学講義録はその後、橘良全により翻訳され、『医科全書生理学篇』として明治十二年から十五年に掛けて出版された。

薬物学の講義に使用された教科書は、ノートナーゲルトロスバツフ共著の『薬物学書』を鈴木孝之助が翻訳した『詳約薬物学』(明治十四年刊行)であり、巻之乾には無機金属化合物、無機酸類、有機酸類、アルコール類、窒素含有化合物類について記載されていた。

内科学の講義ではリンドフライシ著の『病的組織学』などを基に三宅秀が訳著した『病理総論』(明治十四年三月刊)が使用された。第一編では序論として病理学総論、症候学及び診断学を、第二編では疾病論、第三編では原因論などが含まれていた。当時の内科学では、疾病の原因に中心が置かれていた(8)。

外科学の講義では、ビルロート著の『外科通論』を基に佐藤進が訳著した『外科通論』が使用された。内容は切り傷の治療や骨折治療などからなっている。

眼科学の講義では、明治十年頃にシユルツが東大医学部で行つた講義の講義録であり、医学部が明治十四―十五年に出版したものであった。

裁判医学の講義はホルトルマンが明治八年から金沢医学所で行つた「普通中毒学」の講義録を使用していた。これは堤統清が講義したものと見られる(9)。

物理学の講義は、東大医学部の基礎学科で飯盛挺造が、ミュレル、アイゼンロールの物理学書を基に講義したものと

をまとめ、明治十四年に刊行した『物理学』教科書が使用され、水上鉦次郎により講義された。飯盛は第四高等学校の初代の物理学教授であり、教頭でもあった。

化学はランカルト、ゴルブベサネツツ著の『無機化学書』を丹波敬三が翻訳して、出版した『無機化学』教科書が使用され、今井省三が講義した。

動物学はスロイス口述、大田美農里翻訳の『ス魯斯氏講義動物学』が使用された(10)。

#### まとめ

以上の本医学校での医学講義に使用された教科書と原典の関係をまとめ、その結果から次の事柄が明らかとなった。

一、主として明治七―十年の東京医学校時代に来日したドイツ人教師が講義した講義録を使用した。これらの講義の原典は不詳であるが、少なくとも明治八年より以前にドイツで発行された医学書であることは間違いないとみられる。

二、ドイツより輸入された医学書を翻訳して、明治十二―十四年に出版した翻訳書を使用していた。従って、これらの原典はいずれも明治十年より以前に出版されたものであった。

三、婦人科・産科では、ベルツ講義録と記載されている

が、彼の講義録は東大では出版されていない。ベルツが使用した書籍は、シュレーデルの産科・婦人科学書と見られる。

四、この様なことから明治十七年三月からの石川県甲種医学校での医学教育は、当時の最新の医学書を基に講義が行われてはいなかった。教諭達自身が、東大医学部で習った教科書をそのまま使用していたのである。これは当時の全国の甲種医学校で共通した事と見られる。

石川県甲種医学校の各講義の時間数と長崎県甲種医学校の講義時間数を比較すると、二校の各講義の時間数がよく似ている(11)。そして、解剖学と生理学、内科学、外科学を中心とした講義時間の配分がされていた。このことは、他の医学校でも見られ、それぞれの独自性が乏しかった。

#### 文献

1. 第四号「医学校通則」、『文部省布達全書』、第七冊、明治十五年、3―9頁、国立国会図書館蔵
2. 「明治十四年官立大学及び官立府県町村立専門学校一覽」、国立国会図書館蔵
3. 石川県職員録「明治十八年一月三十一日改訂、金沢・池

- 善平、国立国会図書館蔵
4. 「百年のあゆみ」第二章「県立医学校時代」(石川県甲種医学校)、金沢大学第一内科百年史編集委員会、昭和五九年
  5. 『石川県甲種医学校規則』、金沢市立玉川図書館近世史料館蔵
  6. 田口和美著『解剖攬要』、国立国会図書館蔵
  7. チーゲル「生理学」Tiegel, E., Physiologische Vortrage. Tokyo, 1878-1879. 木村孝蔵寄贈、金沢大学附属自然科学系図書館蔵
  8. 『病理総論』三宅秀訳著、東京、明治十四年、国立国会図書館蔵
  9. ホルトマン、A. C. 「普通中毒学」全、藤本純吉筆記、金沢市立玉川図書館近世史料館蔵
  10. 『斯魯斯氏講義動物学』、大田美農里訳述、石川県学校蔵梓、明治七年、金沢市立玉川図書館近世史料館蔵
  11. 小形利彦、「明治期公立医学校の授業科目—分析と特色—」、「洋学」、洋学史学会研究年報、八卷、六七—九四頁、(二〇〇〇)



PAPAVER NUDICAULE

表1. 甲種医学校一覽

	前身校名	設立年	明治14年	認可又は開校年	明治19年	卒業 年次	備考
			校長名	甲種医学校	校長名		
1	岡山医学校	13	菅 芳之	15/5	菅 芳之	13	第三高等中学校医学部
2	大阪府立医学校	13	橘 良詮	15/5	吉田顯三	12	府立大阪医学校
3	長崎医学校	4	吉田健康	15/5	吉田健康	15	第五高等中学校医学部
4	県立千葉医学校	15	二階堂謙	15/10	長尾精一	13	第一高等中学校医学部
5	京都府医学校	5	新宮涼亭	15/11	新宮涼亭	14	京都府立医学校
6	神戸病院附属医学所	12	市川元寿	15/12	神田知二郎	13	21年3月廃校
7	愛知県医学校	11	後藤新平	16/1	熊谷幸之輔	14	愛知県医学校
8	和歌山県医学校	15	野川	16/3	半井英輔	12	20年3月廃校
9	三重県医学校	13	佐藤一之輔	16/6	佐藤一之輔	12	19年3月廃校
10	石川県金沢医学校	9	田中信吾	17/3	木村孝藏	16	第四高等中学校医学部
11	広島病院附属医学校	5	後藤静夫	17/3	佐野龍太郎	14	19年3月廃校
12	福岡医学校	13	熊谷玄旦	16/6	大森治豊	12	福岡県立福岡病院
13	宮城医学校	12	上山五郎	16/6	瀬川昌香	15	第二高等中学校医学部
14	徳島医学校	12	三浦浩一	16/6	三浦浩一	9	19年12月廃校
15	新潟医学校	6	山崎元脩	16/8	三浦省軒	9	21年3月廃校
16	秋田医学校	8	柳 元永	16/8	奥出道有	-	20年廃校
17	熊本県医学校	11	古賀保高	16/3	熊谷正三	12	21年3月廃校
18	福島医学校	14	野川二郎	17/5	新保文輔	14	20年3月廃校
19	大分県立医学校	13	鳥瀨恒吉	17/7	鳥瀨恒吉	12	21年3月廃校
20	岩手県医学校	9	沼波貞吉	17/8	竹内(校長心得)	-	19年3月廃校
21	県立鳥取病院附属医学校	-	-	18/7	高橋盛寧	17	19年11月廃校

文献資料

1. 前身校名、設立年、明治14年の校長名  
「学校幼稚園書籍博物館一覽表、明治14年」文部省、明治15年
2. 明治19年 医学校校長名  
「職員録、乙、明治19-45年」内閣官報局、発行
3. 卒業年次  
「明治初期東京大学医学部卒業生動静一覽(1)」小関恒雄、日本医学雑誌、33巻3号、昭和62年
4. 認可、開校年度、備考  
各学校関係機関の資料。例：学校沿革、県史を参照

表Ⅱ 石川県甲種医学校の教科書

解剖学	田口和美	『解剖攬要』
組織学	田口和美	『人体組織攬学』
生理学・胎生学	チーゲル	「生理学」講義録
薬物学・処方学	鈴木孝之助	『詳約薬物学』
内科学	三宅 秀	『病理総論』
外科学	佐藤 進	『外科通論』
眼科学	シュルツ	「眼科学」講義録
皮膚病・梅毒論	シュルツ	「外科学」講義録
婦人科・産科学	ベルツ	「婦人病学」講義録
裁判医学	ホルトルマン	「中毒学」講義録
物理学	飯盛挺蔵	『物理学』
化学	丹波敬三	『無機化学』『有機化学』
植物学	松原新之助	「薬用植物編」
動物学	大田美農里	『ス魯斯氏講義動物学』



LINARIA ORIGANIFOLIA